

Title	実業家の幸福 : NorrisとHerrickの場合
Author(s)	大井, 浩二
Citation	大阪外国語大学学報. 17 p.113-p.125
Issue Date	1967-03-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80280">https://hdl.handle.net/11094/80280</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 実 業 家 の 幸 福

— Norris と Herrick の場合 —

大 井 浩 二

## The Happiness of the Businessman in Frank Norris and Robert Herrick

Koji OI

Though the portraits of the businessman as a typical American figure are presented in Norris's *The Pit* (1903) and Herrick's *The Memoirs of an American Citizen* (1905), their heroes are destined to fail in their pursuit of happiness, which may be called a purely American ideal. Discussing why the American businessman is impeded from the fulfilment of his American dream, I have ascribed it to a possible split in American culture between the idea of progress and the pastoral ideal.

Frank Norris と Robert Herrick——この二人のアメリカ作家の名前を耳にして読者はいかなる反応を示すだろうか。Norris が自然主義の代表的小説家であることは指摘するまでもないとしても、この自然主義というレッテル自体かなり不快な響きをもっているかも知れない。いまさら自然主義でもあるまい、という声さえ聞えるにちがいない。いや、Norris はともかく、アメリカ作家 Robert Herrick とは、と首をかしげる読者の姿が眼に浮ぶようである。英文学史に詳しい人なら当然イギリス詩人の Robert Herrick を思い浮べることだろう。同名異人を持ち出したのは僕のいつもの悪趣味と言われるとしても、あえて彼の代表作 *The Memoirs of an American Citizen* (1905) を Norris の *The Pit* (1903) と同じ次元で検討してみたいと思うのだ。

さらに言えば、*The Pit* は Norris の作品系列においては駄作に属しているし、*The Memoirs* にいたっては三流小説の域を出ることはあるまい。ともに文学的価値という点では取るに足らない作品であることはたしかである。だが、二作ともに1900年代に書かれ、舞台はシカゴの大都会、そこに登場するのは実業家の主人公というわけで、かなり共通する要素は多いのだ。なによりも、これらの作品にはアメリカ的なヴァイタリティが感じられるのではないか。ここで僕が二作をと

り上げたのも単なる偶然や気まぐれでない点をまず強調しておきたいのだ。

しかし、それにしても実業家の幸福とはまた古めかしいテーマをもち出したものだ、と苦笑する読者がいても不思議ではあるまい。たしかに、実業家は“businessman”の訳語としては不適當な感じもするし、なにかしら一昔まえのメロドラマの登場人物か、さもなくばいかがわしい過去をもつワカ成金の響きがないでもない。さらに幸福とはなんとロマンティックでつかみどころのない概念ではないか。大体、小説作品において「幸福」が扱われるのは、なにもアメリカの、しかも自然主義小説にかぎったことではない。いかに幸福になるかはいわば人類永遠の主題であり、小説家が意識するしないにかかわらず、究極的には考えざるを得ない問題であると言い切ってもよからう。にもかかわらず、僕がアメリカ小説のなかに「実業家の幸福」を見つけ出そうとするのは、そこに一つの特珠な意味を感じとったからに他ならないのだ。そこにはアメリカという状況においてしか期待できない独特の問題がひそんでいると考えられるからであるのだ。

## I

まず、*The Pit* と *The Memoirs* における「実業家」の意味について検討してみよう。一体、アメリカ小説において「実業家」はいかなる特殊性を備えているのだろうか。

*The Pit* の場合、主人公 Curtis Jadwin が堂々たる実業家として登場していることは言うまでもない。僕らが最初に彼を見出すとき、彼は35才の青年実業家であり、“one of the largest real estate owners in Chicago”として高く評価されている。彼はミシガン州の生れで無一物から身を起し、シカゴの隆盛とともに土地が値上げしたのが幸いして、一躍莫大な年収の地位にたどりついたというわけであった。なにはともあれ、Curtis Jadwin はアメリカ流の「成功物語」の主人公であり、その過去の経歴が詳細に書きこまれていないだけに、かえって現在の発展ぶりが僕らの脳裏に刻みこまれると言ってよい。

しかも、Jadwin は利益のためには手段を選ばぬ冷酷無比な実業家というわけでもない。オペラを愛好し、芸術に関心を抱き、文学を語る趣味も持ち合わせている。ときには超人的な実業の才をひらめかせながら、人生の楽しみをゆたかに味わっている教養人とさえ呼んでもいい。この意味では Jack London の小説 *The Sea-Wolf* の船長 Larsen を思い出させるが、かの Wolf Larsen の強烈さは期待すべくもない<sup>(1)</sup>。London の主人公の場合には、あまりにもその動物性が強調されすぎている嫌いがあるとも主張できるだろうが、Norris の実業家にはすくなくとも、その動物性が露骨に表面に押し出されないという点で教養人というイメージが浮びあがるのだ。

といって、この Jadwin が小麦の買い占めに乗り出す事件が *The Pit* の内容となっていること

を思い出せば、彼にもまた自然主義の小説家が好む「獣性」が皆無とはいいい切れないことは勿論である。いや、外面的な優雅さのゆえに、かえって小麦のもつ魔力に惹かれて行く主人公の運命的な必然が僕らにやきつけられると言うべきかも知れない。たしかに「小麦取引場」(the pit)は青年実業家をひきずりこむ「落し穴」(the pit)にちがいないとしても、そこに“the capitalist Jadwin”が生き甲斐を見出していることを僕らは認めねばなるまい。彼の世界は魅惑的な雰囲気にもちているし、同時にそれは“battle-field”でさえある。妻の Laura が感じているように、

Terrible as the Battle of the Street was, it was yet battle. Only the strong and the brave might dare it, and the figure that held her imagination and her sympathy was not the artist, soft of hand and of speech, elaborating graces of sound and color and form, refined, sensitive, and temperamental; but the fighter, unknown and unknowable to women as he was; hard, rigorous, panoplied in the harness of warrior, who strove among the trumpets, and who, in the brunt of conflict, conspicuous, formidable, set the battle in a rage around him, and exulted like a champion in the shoutings of the captains.

と表現することができるのだ。

いずれにしても、最後には Jadwin は小麦の買い占めという“battle”に敗れるが、小麦の魅力にとりつかれたとき、彼は妻を忘れ、名誉も道徳も犠牲にして死に物狂いの活躍をつづける。そこに読者はシカゴという“the great grey city”を舞台に展開する“that other drama, that other tragedy”を感じとるのであり、そのドラマの主人公である Jadwin の栄光と敗北を理解することができる。彼の“I corner the wheat! Great Heavens, it is the wheat that has cornered me.”という言葉には、巨大な資本主義体制の一つの歯車にすぎない「実業家」の嘆きと悲しみが秘められているとも言えよう。

巨大な体制のなかの実業家という点では、Herrick の主人公 Harrington とでも同様である。いや、実業家としてのスケールの大きさから言えば、Harrington は Jadwin よりも数倍もまさっているかも知れない。もちろん、この主人公も数多くの「成功物語」の主人公たちと同じく貧困から身を起す。*The Memoirs* という小説そのものが、その題名から想像することができるように、功成り名とげた大実業家の「回想」という形をとっているものであり、その意味では正真正銘の「成功物語」と呼ぶことができるのである。僕らの目の前に姿を見せているのは、上院議員として政界に入ろうとしている47才の実業家 Edward Van Harrington であり、彼の半生の「回想」はたしかに一つの“apologia pro vita sua”といえるであろう<sup>(2)</sup>。

というのも、実業家としての Harrington の行動にはかなり非難されるべき点が見出されるのだ。

インディアナ州の片田舎から裸一貫で飛び出した主人公は持ち前の才覚を働かせることによって罐詰業者としての成功の糸口をつかむ。だが、その成功のためには判事を買収し、リポートを受けとり、例のヘイマーケットの暴動事件の裁判では被告に不利な陪審員として働くことも辞さないのだ。もちろん、この目的のために手段を選ばないやり口はアメリカの「成功物語」にはしばしば見られるし、大衆的な映画や小説においても用いられる常套手段であるといってもよい。とにかく、友人や肉親を裏切ってまでも実業家としての立身出世を考える Harrington は充分非難に価する人物にはちがいない。

といっても、彼が不正な手段も辞さないのはビジネスの世界だけのことなのだ。たしかに彼は自身反省しているように、“but a common thief, a criminal, who fattened on the evil or the world” にほかならぬ。もちろん、彼には彼なりの根拠がある。

No business in this large, modern world would be done on her [=his wife's] plan of life. That beautiful scheme of things which the fathers of our country drew up in the stage-coach days had proved itself inadequate in a short century. We had to get along with it the best we could. But we men who did the work of the world, who developed the country, who were the life and force of the times, could not be held back by the swaddling-clothes of any political or moral theory. Results we must have : good results ; and we worked with the tools we found at hand.

すべてビジネスのための不正であり悪業であったという考えであるとしても、これが現実の実業家の姿勢があることは否定できぬ。僕らの主人公が世間並みの“the right road”を歩むことができないとすれば、それは彼の実業家として独自の世界を歩んでいることを示しているのだ。

この彼の“the loneliness of life”は彼がその本心においてはきわめて常識的であり良心的な人間であるという事実によって、一層強烈に読者に訴えてくるのではあるまいか。日常生活における彼は借金をできる限り早い機会に返却し、満座で恥をかかせた相手の経済的危機を救ってやり、米西戦争のときには不正な製品で利殖をはかる競争相手を軽べつする。いかにも素朴な常識人としての Harrington のイメージであり、さきに描いた実業家としての Harrington と矛盾しているかに思われるかも知れない。だが、僕らとしては市民としての良心と実業家としての手腕との矛盾にさいなまされる主人公の姿に注目すべきではあるまいか。生来の美德を犠牲にしてまでもビジネスに没頭する Harrington の生き方は、かえって僕らに妥協を許さない大企業の一員としての位置を占める「実業家」の意味を認識させるのである。

ここまで考えてきて、僕らははじめてアメリカ小説における「実業家」の重要性を理解するこ

とができるのだ。大体、アメリカ文学に実業家が登場しはじめるのは19世紀も後半に入ってからではあるまいか。すくなくとも、その本格的な出現を Henry James の *The American* (1877) や W. D. Howells の *The Rise of Silas Lapham* (1885) あたりに見出すことは見当はずれの憶測とばかりは言いきれまい。というのも、アメリカにおいてビジネスが文学者に影響をもちはじめるのは、1840年から1860年ごろであり、この時期にアメリカ経済は W. W. Rostow のいわゆる「離陸状態」に達したと考えられるからである<sup>(3)</sup>。このことを逆に言えば、アメリカにおける実業家がアメリカのいわゆる “manifest destiny” と切りはなせないということであり、小説がこのタイプを描き出している事実は僕らのアメリカ文化研究にとって意味深い現象にほかならないのだ。

この実業家の文学的意義に注目したのは他ならぬ *The American* の著者 Henry James であった。彼は1898年に書かれた一文の中で “business” がアメリカ生活において重要な役割を果たしていることに言及し、 “the typical American figure is above all that ‘business man’ whom the novelist and the dramatist have scarce yet seriously touched, whose song has still to be sung and his picture still to be painted.” と語っていた。

He is often an obscure, but not less often an epic, hero, seamed all over with the wounds of the market and the dangers of the field, launched into action and passion by the extraordinary, the unique relation in which he for the most part stands to the life of his lawful, his inimitable womankind, the wives and daughters who float, who splash on the surface and ride the waves, his terrific link with civilization, his social substitutes and representatives, while, like a diver for shipwrecked treasure, he gasps in the depths and breathes through an air-tube.<sup>(4)</sup>

こう考える James にとって、アメリカの “business man” は “the magnificent theme *en disponibilité*”<sup>(5)</sup>にほかならなかったのである。

従って、Norris と Herrick がその作品において実業家を描いたことは、この Henry James の招きに応じたものと考えていい。上の引用文にあった戦士のイメージは Norris における同種の描写を思い起させるし、女子供の世界に背をむけた実業家の態度は Herrick の主人公のそれを暗示しているといえるかも知れない。アメリカにおいてしばしば “The business of America is business” という言葉が聞かれることからおしても、実業家を「典型的なアメリカ人」を考える James の意見は納得できるし、*The American* における Christopher Newman が見事なアメリカ人の標本として姿を見せていたことを忘れてはなるまい。そういえば、Herrick の作品の題名も「アメリカ市民」の回想であることを強調しているのではなかったか。実業家をアメリカ人、アメリカ市民の

典型とみなすことを僕としてはくりかえし強調したいのだ。

もちろん、この考えはなにも文学の世界においてのみ適用するのではない。H. D. Duncanによれば、“By 1929 big businessmen were leaders of the nation. A religion of money, replete with saints (and sinners), developed.”であり、“Business is religion, and religion is business.”という言葉さえ聞かれるという<sup>(6)</sup>。政治家が実業家を兼ねることは僕らがすでに周知している事実には他ならないのだ。このいわゆる“the deification of the businessman”が今日のアメリカ社会にみられる一般的現象であるとすれば、実業家を典型的なアメリカ人とみなす意見は単なる絵空事などではあり得ない。とすれば、NorrisとHerrickが実業家を例の“rags to riches”の物語の主人公に選んだこと自体、すでに成功という神につかえるアメリカ人が実業家にほかならぬことを示しているといえるのだ。僕らは*The Pit*や*The Memoirs*の二作品にJoyce流のタイトル、“A Portrait of the Businessman as an American”を与えることもできるはずである。

## II

この「実業家」という“the magnificent theme”がアメリカ的であるとすれば、僕がもち出した「実業家の幸福」というテーマもまたきわめてアメリカ的と言えるのではあるまいか。なぜなら、“the pursuit of happiness”こそはアメリカ人の最大の関心事、いやアメリカの国是とさえ呼ぶことができる大問題にほかならないからだ。アメリカ人が独立宣言において“Life”と“Liberty”と並べて“the Pursuit of Happiness”を“unalienable rights”として挙げていたことは今更指摘するまでもない。こう考えれば、「実業家の幸福」とは「アメリカ人の幸福」ということであり、それまた同時に「アメリカ人のアメリカ的問題」と読みかえることすらできると僕は思うのだ。

もちろん、この“the pursuit of happiness”とはつかみどころのない概念にはちがいない。それはH. M. Jonesが見事に喝破しているごとく、“as fundamental, as baffling, as confused, and as interesting an idea as ever appeared in a state paper.”ではある。

It is a notion impossible to define and difficult to forget. Of course, the pursuit of happiness is not an institution in the customary sense of institutions which the Cook Foundation exists to explicate, but the words appear in a basic American document and the concept undelies many of our activities in religion, government, education, business, amusement, and social psychology today.”<sup>(7)</sup>

従って、“the idea of pursuing happiness is thus basic and pervasive in our cultural development.”<sup>(8)</sup> と言い切ることも決して不可能ではないのだ。「幸福の追求ということが一般のアメリカ人にとって、いかに基本的な事柄であるかを知った」<sup>(9)</sup> という意見が聞かれるのも当然のことと言わねばなるまい。

その故にこそ、僕は「実業家の幸福」というテーマにアメリカ的な意味を感じとらずにはいられないのだ。実業家が典型的なアメリカ人であれば、「一般のアメリカ人」の場合にもまして「基本的な事柄」であるだろうし、この点から言っても *The Pit* と *The Memoirs* における Curtis Jadwin や Edward Van Harrington の幸福度を測定することは興味ある課題でなければならぬ。

まず、*The Pit* において Jadwin と妻の Laura は、すくなくとも結婚の当初は幸福感を味わうことができる。Norris は “her happiness had seen perfect. Literally and truly there was not a cloud, not a mote in her sunshine.” と記し、Jadwin 自身に関しても、彼が “no less happy” であったことを説明している。

In those first three years after their marriage, life was one unending pageant; and their happiness became for them some marvellous, glittering thing, dazzling, resplendent, a strange, glittering, jewelled Wonder-worker that suddenly had been put into their hands.

大げさな表現を使えば、Jadwin と Laura とはエデンの園の Adam と Eve のごとき幸福を味わうことができたのであった。

しかし、やがて Jadwin は小麦の魅力にとりつかれる。実業家としての本能に目覚めたとき、彼の心のなかには小麦しかない。Laura が “It’s wheat—wheat—wheat, wheat—wheat—wheat, all the time. Oh, if you knew how I hated and feared it!” と叫ぶのも無理からぬことと言わねばなるまい。もはや二人は幸福を感じることはできぬ。ただ “If I had only known then that those days were to be the happiest of my life……” とくりかえすばかりであり、“I was happy then.” という Laura の言葉は過去形で表現されるほかないのである。Jadwin にしても今や感じることのできるのは小麦のもたらす “excitement” ばかりであり、この “great manipulator” もその妻も不幸のどん底にあって、 “Oh, now I am alone, alone, alone !” とくり返す毎日が訪れている。極めて意外なことながら、いま僕らのまえにいるのは「不幸な実業家」であり、幸福の追求に失敗した典型的なアメリカ人にほかならぬ。いかにも皮肉な事態の発生を僕らはどのように説明すべきなのか。



全く同様なことを Herrick の作品についても言うことができる。成功の梯子をのぼりつめたはずの実業家 Harrington もまた幸福を味わうことを許されない。彼はその成功の夢のゆえに “a home and a family” を、つまり “just that plain, ordinary happiness which our unambitious fathers and mothers took out of life” をあきらめねばならないのだ。Herrick はとくに “Happiness” と題する一章を設けているが、ビジネスでの成功が幸福をもたらさないことを述べ、主人公に “I suppose a woman counts on happiness. But I have never counted much on that.” と言わせている。Harrington を支配しているのは “the hunger love at the bottom of the heart, which with most is never satisfied, and maybe never can be satisfied in this life” であり、この支配に身をまかせた彼には “something very wonderful and precious” がすぎ去るのをどうもし難いのだ。実業家としての彼を理解する唯一人の女性と語り合う場面でも、彼は “There’s no happiness in it.” とくりかえし、 “Do you look for happiness? That is for children!” と言われたとき、彼は “Then what is the end of it?” とつぶやくのである。

For of a sudden the spring of my energies was slackened within me, and the work that I was doing seemed senseless. Somehow a man’s happiness had slipped past me on the road, and now I missed it. There was the joy we might have had, she and I, and we had not taken it. Had we been fools to put it aside?

この Harrington の嘆きは幸福を見失った実業家の姿をはっきり浮びあがらせているのであり、*The Pit* の主人公の気持を代弁しているともいえるのだ。

それにしても、幸福を獲得できない実業家とはアイロニカルではないか。たしかに彼の目的は幸福の追求ではないかも知れない。富の追求こそがすべてであることは明白であるだろう。だが、実業家が典型的なアメリカ人であるという立場をとるかぎり、幸福ならざる実業家はそのまま不幸なアメリカ人に重なり合うのであり、すくなくとも僕にはその意外な結末が驚くべき新鮮さで訴えてくるのである。一体、なぜアメリカの実業家は幸福の夢を実現できないのか。この問いかけを僕は禁ずることができないのだ。

そのまえに僕としては *The Pit* や *The Memoirs* における実業家の姿が Norris や Herrick の異常な産物でないということを指摘しておかねばならない。H. M. Jones は “an enormous library of fiction which portrays the American businessman as unhappy” に言及し、

In Howells, in Frank Norris, in Jack London, in Sinclair Lewis, in the novels of J. P. Marquand, we have the fiction working out of Emerson's theory that going into business shrinks young men. The incapacity of business life to fulfill one's dream of happiness is the point in characters as remote from each other as Mark Twain's Beriah Sellers, Sinclair Lewis's Babbitt, and the Great Gatsby of F. Scott Fitzgerald.<sup>(10)</sup>

と述べている。Jones 教授によれば、“the assumption that business creates happiness”にもかかわらず、“the opinion that wherever else the pursuit of happiness may lead us, it cannot lead us with hope of success into industry, banking, advertising, manufacture, or commerce”がアメリカに存在するのは、“an extraordinary split in our culture”<sup>(11)</sup>と考えられるが、僕らとしてはその“split”の原因をつきとめたい気持ちにかり立てられるのである。

とはいうものの、僕はここで重大な問題を片付けておかねばならぬ。実業家の幸福といい立てながら、実は僕はまだその「幸福」の定義を下していなかったではなかったか。もちろん、幸福とは何ぞやとここで開き直す余裕もなければ能力もない。しかし、すくなくとも Norris と Herrick の作品における人物たちが考えている「幸福」の実体は明確にしておく必要はあるだろう。Jadwin や Harrington が実業家として「幸福」を手に入れることができないとすれば、一体彼らの「幸福観」はいかなる類のものであるのか。つまりは「アメリカ人」の幸福観を考えておかねばならないのだ。

### III

Norris の作品において、Laura が New England の片田舎の生れであったことはくりかえし強調されている。彼女は “the narrow little life of her native town” のゆえに “the vast, cruel machinery of the city's life” に容易に馴染むことができない。シカゴという “The Great Grey City” にあこがれながらも、

She dreamed of another Laura, a better, gentler, more beautiful Laura, whom everybody, everybody loved dearly and tenderly……and who should die beautifully, gently, in some garden far away……and all the world should be sorry for her, and weep over her when they found her dead and beautiful in her garden, amid the flowers and the bird, in some far-off place…

と記されている。彼女には “city” よりも “garden” への憧れが強かったとも言えるのではないか。夫の Jadwin にしても “a pretty big pot of money” を作った実業家としての生活に慣れることができない。彼にとって成功は “kind of queer” であり、“I can remember the time, up there in Ottawa County, Michigan, on my dad's farm, when I used to have to get up before daybreak

to tend the stock, and my sister and I used to run out quick into the stable and stand in the warm cow-fodder in the stalls to warm our bare feet.”と語る彼の言葉には田園生活を肌で知っている男の感慨がこめられている。Laura や Jadwin のみならず、その友人の多くは地方に生まれてシカゴに住みついた連中であつた。

Jadwin が小麦の買い占めに失敗したとき、二人は手を取りあつて “the West” での新生活に出發しようとする。彼は実業家としては破産したのだが、それは彼らが “a wrong notion of things” に従つて生活していたからであり、“We started right when we were first married; but I worked away from it somehow, and pulled you along with me.” という彼の言葉は彼らの「幸福感」が都会の生活やビジネスの喧騒のなかでは充分になり得ないことを示している。「西部」で “new life” をはじめることにより “our future, which is to be happier than any years we have ever known” を期待するという Laura は、明らかに大自然に抱かれたときにこそ人間は幸福になり得るという考えを表明しているのだ。

Herrick の作品においても、その自然観には変りない。主人公 Harrington がインディアナ州の片田舎の出であることはすでに触れておいたが、彼が実業家としての成功に満足することができないとすれば、それは彼の幸福観に由来するにちがいない。たとえば、彼の方針を非難するのは New England に住む昔風の実業家であり (Howells の Silas Lapham を思わせる人物である)、この人物の言葉でいえば “to one who has lived life, and knows what it is, there is mighty little happiness in a million dollars!” ということになる。Harrington は勝利感を味わいながらも、この “old gentleman’s remarks” を忘れることができないし、“there was yet something unsatisfied about my heart.” と告白している。あるいは彼を “the worst evil in our country” をきめつける兄嫁にしても、やはり彼と同郷の出身である。彼女の素朴な価値判断を “sentimental” として斥けながらも、彼はなお相手に自らの立場を説いてやまない。ということは、彼自身の「幸福」の定義が彼を非難する人々と同一であることを示しているのだ。Harrington が “the wrong I have done in my life is as nothing compared with the good I have done.” と言うのは、みずからの不正を認めているからであり、その故の不幸な気持といわねばなるまい。彼は “Surely there was another scale, a grander one, and by this I should not be found wholly wanting!” とつぶやく以外に心を慰める方法を知らないのである。というのも、彼の「幸福観」が自然に根ざすためであり、それはまたアメリカ人一般の幸福観と言ってもよい。「日常の実際において、彼らがいかに土に近く、大自然に愛着を持っている人間であるかも知った。私の知る多くのアメリカ人が幸福を最も感じているとき、それは人の手や文明の恩恵がいまだ至らぬ、自然のままの自然の中に

いるとき、なのであった」<sup>(12)</sup>という意見の聞かれるゆえんである。

いずれにしても、Norris と Herrick における実業家たちは田園生活に強い執着をもつ人々であり、そのゆえの不幸であると言わざるを得ない。田園から都会への移動、それに伴う成功の夢、そして幸福感の消失——この図式がきわめてアメリカ的な意味をもっていることは、二つの作品の書かれた1900年代を背景において考えるとき、さらに一層明らかになるだろう。一般にアメリカ史で“the progressive generation”といえは1890年から1917年までの時期を指しているが、この時期にはアメリカの数多くの矛盾がはっきり姿をとってきたといえよう。たしかに、この時期にアメリカ国民は“a dramatic struggle between traditional dogmas and the forces of a new scientific and industrialized world”<sup>(13)</sup>を経験していたとすることができるだろう。別の論者の言葉を借りれば、“The country began to be fenced in by barbed wire, and mechanization came to the farm. Capitalist economy, controlled by the cities, moved on to the farms in the shape of mortgages or such expensive implements as reapers and harvesters, putting the farmers into big business or in the grip of it.”<sup>(14)</sup>ということになるだろう。

だが、僕らはこの時期のアメリカの問題を単に「古い」アメリカと「新しい」アメリカの衝突としてのみ受けとることができるだろうか。たしかに、そこに見られるのは機械文明の発展であり、そのまゝに混乱する農村の風景であるにちがいない。アメリカの近代化の一過程であるとして割り切ることもできるだろう。アメリカに特異の問題というよりは、およそ近代化を目指す国には例外なく見られる現象であると言えるかも知れない。にもかかわらず、あえて僕はここにアメリカの矛盾が露呈していると考えたいのだ。しばしば指摘されるように、アメリカ国民は根深い自然への憧れを抱いているし、開拓者精神はその顕著な一例といってもよい。Henry Nash Smithはそれを“the myth of the garden”と呼び、Leo Marxは“the pastoral ideal”と名付けたが<sup>(15)</sup>、いずれもアメリカ人生来の素朴な自然観念を適切に表現している。と同時に忘れてならぬことは、アメリカ人独特の“manifest destiny”の観念であり、これがアメリカの帝国主義的な発展を正当化するための標語であるにしても、アメリカ国民の発展の使命を表現していることは否定できないのだ。つまり、アメリカにおいては、この“the myth of the garden”と“manifest destiny”とが重要な二本柱を構成し、アメリカ人の理想になっていると考えられるのだが、1890年代にいたって、いわゆる“frontier”が消滅すると時を同じくして“manifest destiny”なる標語が盛んに用いられたことは一体何を意味しているのか。

ここで考えてみれば、アメリカ人の二つの理想は極めて複雑な関係をもっている。いわゆる“the pastoral ideal”を抱きつつけるためには自然の存在が必要なのだが、他方“manifest destiny”

は機械文明の進展による自然の破壊を意味する。二つながらに最もアメリカ的な観念でありながら、一方を満足することは他方の否定にほかならぬ。Robert W. Schneider 教授の指摘しているように、“The problem arose from the growth of institutions and traditions implied in the idea of manifest destiny. The realization of this destiny would mean the loss of the innocence of the savage in the garden and an institutional infringement of the liberty of the self-sufficient individual.”<sup>(16)</sup> 従って、“the Progressive era”におけるアメリカの行き詰りは単に一時的な現象ではなく、アメリカに内在する本質的な矛盾が形をとったものと考えねばならなくなる。この時期に“frontier”が消失し、“manifest destiny”が唱導されたことは一見きわめて自然な因果関係に思われるけれども、その背後には容易に解決し得ないジレンマがひそんでいたのである。自然の子でありながら機械文明の担い手となろうとする努力を強いられるのがアメリカ人であり、その複雑な運命を描き出すのがアメリカ作家の仕事であると言っても過言ではあるまい。

こう考えてくると、実業家の幸福というテーマは深くアメリカ文化の本質に結びついているのであり、先に引用した Jones 教授のいわゆる“split”はこの関連において理解されねばならぬ。典型的なアメリカ人としての実業家が物質的な目的を追求すればするほど、彼は牧歌的な理想から遠ざかって幸福とは無縁の人間にならざるを得ない。といって、この「幸福」はアメリカ人である限り容易に捨て去ることはできない。結局のところ、実業家は不幸にならざるを得ないのであり、この現象こそはアメリカ的矛盾の端的なあらわれであって、容易に解決することができない性格を帯びているのだ。いや、アメリカがつづく限り消え果てることのない大問題と言わねばなるまい。

にもかかわらず、Norris と Herrick の作品においてはこの問題はいとも簡単に解決されている。*The Pit* においては不幸な実業家は西部で新天地を開くことにより幸福をとりもどそうとするし、*The Memoirs* においては不幸な実業家は政界へ進出することによって幸福の夢は捨て去ってしまう。しかし、この結末は決して問題の本当の意味での解決にはなっていないのではあるまいか。*The Pit* では牧歌的な理想にのみ焦点があてられることになって、ジレンマは主人公に感じとられないままに終わっている。この作品が1903年のベストセラーになったのは、“Norris’s capitalist repents his single-minded pursuit of power and is willing upon the loss of his money to face a simple life of hard work in the west.”<sup>(17)</sup> という事実が大衆にアピールしたためであろうが、この「西部」もまたいつかは“manifest destiny”の犠牲となることを考えれば、この作品の結末が満足すべきものでないことがはっきりするであろう。Herrick の主人公にしても彼のジレンマの真の意味に気がついていないし、問題の解決は“a grander scale”つまり神にまかせたままで成功へ

の道を突進している。作者はこの作品について、“I was right about the inner working of my packer—that was the real reason for what success I had with ‘The American Citizen.’” と語っているが<sup>(12)</sup>、「アメリカ人」である「実業家」の“inner working”を意識していたとは考えられない。

結局のところ、不幸な実業家の苦悩はそのままアメリカ人の苦悩につながるはずであり、その内面を深く掘りさげることにより、アメリカ文化に内在する「矛盾」を、Jones 教授のいわゆる“split”を探ることができるにちがいない。「実業家の幸福」という素材がもつこの可能性に気づかなかったところに、Norris や Herrick の作品の限界があり、それらが三流作品として名をとどめているにすぎない原因があるのではなかろうか。

#### 註

- (1) 拙稿「ロンドンの『海の狼』」*Caliban*, No. 2 (1965年) 参照。
- (2) Blake Nevius, *Robert Herrick: The Development of a Novelist* (1962), p. 122.
- (3) W. W. Rostow, *The Stages of Economic Growth, A Non-Communist Manifesto* (1960) 参照。
- (4) Henry James, “The Question of Opportunities,” *The American Essays of Henry James*, ed. Leon Edel (1956), p. 202.
- (5) *Ibid.*, p. 203.
- (6) H. D. Duncan, *Communication and Social Order* (1962), pp. 362-3.
- (7) H. M. Jones, *The Pursuit of Happiness* (1966), p. 1.
- (8) *Ibid.*, p. 5.
- (9) 都留重人『アメリカ遊学記』(1950年) 147頁。
- (10) Jones, p. 120.
- (11) *Ibid.*, p. 121.
- (12) 犬養道子「アメリカ人の幸福観」『潮』(1966年12月号) 173頁。
- (13) R. W. Schneider, *Five Novelists of the Progressive Era* (1965), p. 1.
- (14) J. D. Hart, *The Popular Book* (1961), pp. 202-3.
- (15) H. N. Smith, *Virgin Land* (1950) 及び Leo Marx, *The Machine in the Garden* (1964) 参照。
- (16) Schneider, p. 12.
- (17) Hart, p. 220.
- (18) Quoted in Nevius, p. 137.